

論文提出者氏名 柴田真希都

柴田真希都氏の「明治知識人としての内村鑑三—その批判精神と普遍主義の展開」は、明治期の内村鑑三について、その膨大なテキストを渉猟し、知識人という新たな視点からその言動を跡づけた労作である。

本論文は、序論「近代知識人論の問題意識から見た内村鑑三」、第一章「現状に対する異議申し立て」、第二章「独立・自由・個」、第三章「亡命者・周縁者・アウトサイダー」、第四章「世界市民の立場からの告発」、第五章「反政治的志向の知識人」、及び「考察と結論」からなる。以下、論文の構成にしたがって、内容の概略を記す。

序論では、従来「信」の人として捉えられることの多かった内村鑑三を、明治期の言論形成を担った知識人として捉え直そうという視座が提起される。知識人の範型についてE・サイードとJ・バンダの知識人論を参照した上で、知識人としての内村が、その思考の原理として取り出されるhumanity（これを柴田氏は西洋近代において普遍的な諸価値であるとする）とdivinity（これを柴田氏は聖書・福音主義の諸価値であるとする）との二つの面、科学性と実存性、書齋と外界、ヘブライズムとヘレニズムといった対比の軸において検討されることが予告される。

第一章第一節「批評家としての活動とその影響」は、社会批判の論陣を張ることで注目を浴びた内村が、社会主義活動家、白樺派の青年たちなどに影響を与えたことを確認し、内村の批判精神の何が彼らを引きつけたかを論じる。日本と日本人への批判の立脚点となる道徳および人道主義とが具体的文脈の中で指摘され、アメリカを念頭においた世界との対照が示される。第二節「言論統制下の批評の技術」は、内村の言論活動が政府当局による言論統制を強く意識していたとする仮定のもとに、内村がいかなるレトリックによって統制をかいくぐったと考えられるかを反語表現、ユーモアといった観点から論じる。第三節「諸概念の読み替えと通念の攪乱」は、しばしば「矛盾」を指摘される内村の言動をめぐって、それが内村にとっての理想と普遍的価値に照らしてなされたものであること、また内村の思惟の特徴として、異なる価値間の緊張関係、弁証法的思考、ドグマとの対決姿勢などが挙げられることを指摘する。

第二章第一節「個人あるいは単独者であることの意義」は、社会階層・党派を離れた個人として行動する「単独者」としての内村に着目し、個人の独立と靈魂の救済を重視した内村の言動をたどる。内村は、経済的独立を基盤と意識しつつ、真理、正義、個人、自由の価値を強調したのである。第二節「反「社会」思想」は、個人に介入する社会に対し不信を表明した内村が、社会を越え出る価値を模索していたこと、個人と社会との安易な和解を拒否していたこと、当時影響力を持ちつつあった社会主義思想とも対決したこと、そのような徹底的に反社会的な姿勢が、当時の日本社会において独自の存在意義を持つに至ったこと、などを論じる。第三節「単独者による友誼・共同体・自治」は、自由で独立した個人を出発点に据える内村が、個人と個人のあいだの友誼と、個人を単位とする共同体を重んじたことを、『聖書之研究』等内村が関わった雑誌に拠る交友関係、「教友会」といった団体を例に論じる。

第三章第一節「exileの自覚者」では、内村が「不敬事件」や破婚体験以降「亡命者意識」を持っていたこと、この「亡命者意識」が内村の著作には顕著であり、内村が取りあげる人物にもexileとしての性格が強いことなどが、その社会意識、生活意識、故郷意識との関連で論じられる。また北海道やアメリカに寄せる振幅の大きな感情も、実例として確認される。第二節「周縁的存在」は、都会と田舎との媒介者たらしめる言説、隠遁生活への志向を、その周縁意識とからめて論じる。第三節「異端への価値づけ」は、みずからも「不敬事件」や『東京独立雑誌』廃刊問題等で人々から擯斥される経験を持った内村が、世の誤解というものにどう向きあったか、キリスト教における正統と異端をどのように自身の問題として受け止めたか、異端が内村においては個人の独立といか

に結びついていたかを論じる。

第四章第一節「世界市民性への到達」は、「二つのJ」（Jesus と Japan）という言葉とともに愛国者として語られることのある内村に、世界市民としての意識が強くあったことを論じる。これは日露戦争後にはさらに天国の市民の意識へ変貌するが、そこには文明の発展という観念への悲観もみられるとされる。第二節「「愛国者」による「愛国心」批判」では、内村における愛国が、不敬事件の経験を通して、普遍的諸価値とのすりあわせにおいて成立していること、その愛国心は国家体制への批判を含んだ日本との緊張関係のなかに成立していることが確認される。第三節「社会改革の論理と倫理」では、内村が社会の改革は人を作る営みにはじまると捉えており、政治は結果であって市民の道徳こそが原因であるとして、個人に高い倫理性を要求していたことが論じられる。またその実践の姿を示すものとして足尾鉍毒事件をめぐる内村の言動が辿られる。第四節「知識人の仕事としての聖書研究」では、社会的言論活動と対比される、内村における聖書研究・聖書理解が、内村における弁証法的思惟構造の一翼を担うものとして改めて強調される。個別的であるがゆえに普遍的であるということが内村の信念の核をなしていたが、それは内村の聖書理解に深く関わる。聖書研究における来世的志向が社会改革という現世的思考へと接続されるとも指摘されるのである。

第五章第一節「抽象的真理の側からの現実主義批判」は、内村の現実主義・実利主義批判に触れる。内村の現実主義批判は、西洋的普遍主義からの世俗主義批判であるとされるが、批判は日本のみならずアメリカにも向けられる。それは divinity の側からの批判であるとされる一方、内村の政治批判にみられる現実との関わり方は、知識人としての立場に要請される高い倫理性に裏付けられることが確認される。第五章第二節「共和制評価の射程」は、精神の次元における共和主義を唱えた内村が、共和主義をキリスト教と親和的なものと考え、社会的共同体の基礎に据えようとしていたこと、共和主義をまずは個人による自己尊重の精神と捉えており、その延長上に政体についての展望と歴史的事例への関心があったとする。第三節「非戦論」は、日露戦争時における内村の非戦論を論ずる。柴田氏は、日清戦争を義戦と捉えた内村の言動を知識人としての責務への裏切りであったと断ずる一方、内村が徐々に知識人としての自覚を深め、みずから強く自省するなかで非戦論の立場が鮮明となったのだとする。内村の言説を賞揚することの多い本論において、この節の記述は例外的に内村批判の色調が濃い。

「考察と結論」においては、知識人としての内村が、明治期の日本の知的枠組をはみ出す普遍的な知性を持ち得たことが強調される。内村という個人をとりまく歴史的、地域的、文化的特性とその個性が、周縁的存在であること、アマチュア性を持つこと、権力に対して真実を語ることを責務として語る知識人論の文脈においていかに論じうるか、それが内村の信仰との関連でどのように位置づけられるかが、あらためて確認されるのである。

以上のように要約される本論に対し、審査委員からは、内村を知識人として論じた視角の新しさを評価する意見があった。DVD版全集を用いての網羅的な引例は大きな成果を挙げている。また内村の個々の言動に関する解釈にも今後の議論を刺激する面が多々ある。一方で、取りあげられるトピックが多く、論文全体の構成がやや見えにくい上、同一の歴史的事実への言及が繰り返されるなど、読者を配慮した記述の工夫が足りないのではとの指摘があった。また「知」や「普遍的諸価値」といったものの内容を掘り下げて記述すべきではなかったか、内村が關った対象は明確に切り分けられているが、内村自身を研究対象として論じる際の論者との距離がやや近いのではないか、『万朝報』記者時代の活動を扱った記述においては検閲に関する実証的な裏付けが不足しているのではないかと、との指摘もあった。個々のテキスト解釈においても再考の余地を残すところがある。ただし、これらは本論の学術的価値を本質において損なうものではないことも、審査委員の間で確認された。

以上の判断により、本審査委員会は、柴田真希都氏の学位請求論文が、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであると認定することに、全員一致で合意した。